New National Theatre, Tokyo 2021／2022 SEASON

DRAMA

シリーズ 声（こえ）

議論、正論、極論、批判、対話：この物語

DER BESUCH DER ALTEN DAME

Written by Friedrich Dürrenmatt

作◉フリードリヒ・デュレンマット

翻訳◉小山ゆうな／演出◉五戸真理枝

貴婦人の来訪

新国立劇場

NEW NATIONAL THEATRE TOKYO

ものがたり

小都市ギュレン。かつて栄えたこの町も、今は貧困に喘いでいる。ある日、この町出身の大富豪クレール・ツァハナシアン夫人が帰郷する。彼女が町を復興させてくれるのではないかと期待に胸を膨らませる町の人々。夫人はある条件のもと巨額の寄付を申し出る。「正義の名において、かつてこの町で受けた不正を正してほしい」……。

SYNOPSIS

The story opens in the small town of Güllen. The town was once prosperous, but has fallen on hard times. One day, Güllen is visited by a wealthy woman named Claire Zachanassian who grew up there. The townspeople are filled with hope that Claire will help to revitalize the town. She offers to donate a huge sum, on one condition. What she asks is that a wrong done to her here years ago be corrected, in the name of justice.

CONTENTS

ごあいさつ　小川絵梨子 …… 2
ものがたり …… 3
CAST & STAFF …… 4
CAST プロフィール …… 6
対談　小山ゆうな × 五戸真理枝
　「正義」を巡る、悲劇を突き抜けた喜劇 …… 13
『貴婦人の来訪』をよりよく理解するために　増本浩子 …… 17
世界の不安と「沈黙のらせん」―ギュレンの街と私たち　亀田達也 …… 20
「シリーズ 声」のビジュアルができるまで
鶴貝好弘　芦野公平 …… 22
稽古場風景 …… 24
STAFF プロフィール …… 26
演劇とわたし Vol.22　鈴木光司 …… 27
世界の演劇事情③ ベルリン デュッセルドルフ　中島那奈子 …… 28
Review『ロビー・ヒーロー』／ギャラリープロジェクト／
　演劇研修所から …… 30
Next 演劇次回公演／オペラ・舞踊公演案内 …… 31
2022/2023 シーズンラインアップ …… 32
特別支援企業グループ …… 33
賛助会員芳名 …… 37

Der Besuch der alten Dame

For the third installment in our series entitled "Voices: Stories exploring discussion, criticism, dialogue", NNTT presents Friedrich DÜRRENMATT's most important work, *Der Besuch der alten Dame*. First performed in 1956, *Der Besuch der alten Dame* stirred discussion as it was viewed as an antithesis to a society's commitment to totalitarianism. The play has since been mounted under numerous directors around the world, and has been performed not only as a play, but also adapted to cinema, opera, and musical theatre.

How are human relationships shaped by speaking with others in the course of repeated discussions, and what kind of society is produced? Directing the final work in this series is GONOHE Marie, whose bold and unique direction of *The Lower Depths* at the NNTT is still fresh in our minds. We hope you enjoy the production.

世界の不安と「沈黙のらせん」――ギュレンの街と私たち

亀田達也
東京大学大学院人文社会系研究科

「陰謀論」という言葉がある。重大な社会問題が「なんらかの政治・経済・宗教的な動機をもった強力な個人や組織の陰謀」により引き起こされているという信念だ。疫病や飢饉などの原因を「魔女」や「妖術」のせいにしたヨーロッパ中世の魔女狩りはその典型である。陰謀論は、社会・経済が不安定な時代にとくに流行しやすい。インターネットを中心に、「秘密結社が世界を裏で支配している」という主張（〝Qアノン〟）が、2016年・2020年のアメリカ大統領選挙に大きな影響を与えた。その背景には、製造業の発展を支えてきた「白人労働者層」が産業変化によって職を失い、大きな不安と失望を抱えているという現状がある。

さて、『貴婦人の来訪』の舞台となるギュレンも、「ゲーテが滞在し、ブラームスが弦楽四重奏曲を作った」という過去の栄光は失われ、街全体が深い貧困に苦しんでいる。第1幕の冒頭で、市民たちが経済的窮乏の原因について「フリーメイソンの陰謀だ」、「ユダヤ人のせいだ」、「国際的な共産主義者組織だ。裏で糸を引いているのは」と語るのも陰謀論の例だろう。このような陰謀論は、困った問題に対して「わかりやすい、即座の回答」を与える。「悪者」を取り除きさえすれば問題はただちに解消するのだから、「自分たち」が一致団結することが何よりも大事だ。こうした「自分たち」対「悪」という図式は、人々の素朴な感情に訴えやすい。

しかし、ここに1つの問題がある。「フリーメイソン」や「ユダヤ人」といった対象は抽象的すぎて、ギュレンの人々が結束するための焦点にはなりにくい。アメリカ大統領選挙において、不安と失望を抱える「白人労働者層」が政治的に結集するためには、「エリートやリベラルという悪（秘密結社）と戦うドナルド・トランプ候補」という具体的なイメージが必要だった。同じように『貴婦人の来訪』では、貴婦人クレールの言葉が、経済的窮乏を「解決する」ための具体的な焦点を人々に与えた。クレールが持ちかけた「解」は、40年前に自分を裏切り酷い目にあわせた元恋人イルを殺せば、ギュレンの街に巨額の寄付をするという提案だった。ここから事態が動き始める。

もちろん、イル本人が街の経済的窮乏を引き起こしたわけではない。イルは窮乏の原因ではないが（×「イルの存在→窮乏」）、イルの死は窮乏を解決すること（○「イルの死→窮乏の解決」）―この2つの事実の違いをギュレンの人々は十分に認識している。

この意味で、イルは「陰謀をたくらんだ張本人」にただちにはなり得ない。実際、第1幕の最後で、貴婦人クレールの提案に対して、「ここは文明国です。異教徒の地でもありません。ギュレンの名においてあなたの申し出を拒否します」と町長は述べ、その演説にギュレンの人々は喝采する。つまり、人々がイルを死刑にする決断に進むためには、2つの事実の違いを「忘れる」（あるいは「見ないこと」にする）ための集団的な仕掛けが必要だった。

こうした仕掛けは、人々の間での会話と「拍手・喝采」によって提供される。貴婦人クレールからの巨額の寄付を暗黙に期待する人々はさらに借金を重ね、経済的窮乏は深まるばかりだ。そのような中、イルの過去の悪についての「断罪」が次第に始まる。イルの行い（17歳のクレールを妊娠させたうえ、子供の認知を拒むために裁判で仲間と一緒に偽証した）は「不正義」であり、「ヨーロッパの価値を根本的に否定する」という断罪である。第3幕での教師の演説は、人々の拍手・喝采をもって迎えられた。

社会心理学や政治学で「沈黙のらせん」という現象が知られている。ある立場が「多数派」のように見えると、「少数派」の自覚をもつ人々が、孤立や迫害を恐れて自分の意見を言いにくくなり、沈黙がさらなる沈黙を呼ぶという増幅現象である。アンデルセンの『裸の王様』では、「王様が服を着ている」と考える人は王様自身を含めてただ1人もいなかったにもかかわらず、沈黙が街全体を支配した。

たしかにイルの行いはモラルに反している。そのことに強い道徳的怒りを覚える人々は多いはずだ。しかし、イルの行いに対する「神の裁き」がギュレンの街に下され、街全体の困窮をもたらしているわけではない。その意味で「イルは不正義である」という断罪は、街全体の窮乏の解決に向け「自分たちの欲望の論理」を「公共の正義の論理」にすり替えているのではないかと、内心では首をかしげる人もいるだろう（なぜ今になって、イルの過去の行為がことさら非難されるのか!?）。しかし、疑問をもつ人も「多数派」の拍手・喝采を前に、沈黙を守らざるを得ない（あるいは、自らの保身のために、進んで拍手・喝采をすることさえあり得るだろう）。こうした「同調圧力」が働く場面を、コロナ禍はもちろん、私たちはさまざまな場面で経験している。

重要なのは、沈黙のらせん・同調圧力が作用するのは、「全体主義社会」や「強権国家」だけではないという点だ。周囲の人々の行動に応じて自分の行動を調整すること、「世間」に配慮することは、集団生活を営むヒトという種に普遍的に備わっている自然な心の働きだろう。魅力的な言葉や、「正義」の標語・理念に共感する心も同様である。こうした心の働きは、ヒトが集団を作り集団の中で生きていくための要件であり、私たち人類は、社会的な感受性や共感性を備えているからこそ、集団・組織として成功し、さまざまな協力や社会規範・秩序を保つことができる。つまり集団としての「集合知」と、沈黙のらせん・同調圧力が招く「集合愚」は別々の存在ではなく、社会的な感受性や共感性が共通して作用する「コインの裏表」と言えるだろう。

集合愚ではなく、集合知を生み出すためにどうしたらよいのか？「個人の独立心や理性」の働きは重要だが、それだけに期待するのではなく、集合愚を生み出さないためのストッパーを「社会の仕組み（制度）」としてどう設計し集団に組み込むかが問われている。社会や経済についての不安が世界全体に共通する「今・ここ」の問題である以上、私たちはギュレンの街の物語と無関係ではいられない。

かめだ・たつや
1960年生まれ。実験社会科学、社会心理学、行動生態学。東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室教授。著書に『連帯のための実験社会科学―共感・分配・秩序』（岩波書店）、『合議の知を求めて―グループの意思決定』（共立出版）、『モラルの起源―実験社会科学からの問い』（岩波新書）、共編著に『複雑さに挑む社会心理学―適応エージェントとしての人間』（有斐閣）、『進化ゲームとその展開』（共立出版）などがある。